

社会知性開発研究センター シンポジウム

社会知性開発研究センターの3研究センターが主催するシンポジウムが10、11月に行われ、研究報告と活発な意見交換がなされた。

ソーシャル・ウェルビーイング

古代東ユーラシア

心理学



▲ パネル討論で活発に意見が交わされた

社会知性開発研究センター「ソーシャル・ウェルビーイング」研究センターのシンポジウム「幸福をつくる政策」が11月28日、神田キャンパスで開かれた。社会との関わりの中で人々に幸福感をもたらすものは何か、約50人を前に経済学と社会学の観点から議論が交わされた。

原田博夫センター代表(経済学部教授)の趣旨

説明のあと、経済学者の2氏が基調講演。一橋大学経済研究所教授の小塩隆士氏は、人や地域のつながりと幸福感の関係について、自身の研究成果も踏まえて解説。横浜市立大学教授の白石百合氏は「行動経済学」の立場から「幸福感は結婚や健康、職場の生産性など金銭以外の要因のほうに

持続する。所得という結果より、子育てや仕事のやりがいなどプロセスから得られる効用に注目している」と語った。

原田教授のモデレーターで行われたパネル討論では、社会のあり方と個人の幸福感を関連づけて研究する意義を議論。小塩氏は「就業形態の違いによる幸福感の落差など、社会の問題点を拾い上げることで」と評価。原田教授は「社会に矛盾や理不尽を感じている人々の存在を明らかにし、問題提起につな

最終講義のご案内
12月14日現在
本年度は9教授が定年退職されます。最終講義を行うのは次の方々とす。学部学科に関係なく、どなたでも受講できます。卒業生もご参加ください。

◆ 樋口淳文学部教授
1月20日(水) 9時
生田キャンパス10202教室
◆ テーマ「日本の民話を語り継ぐ」
◆ 仲川恭司文学部教授
1月20日(水) 14時50分
生田キャンパス9号館書道室
◆ テーマ「専修大学に33年間勤めて―書道と教育・研究―」
◆ 中村友保ネットワーク情報学部教授
1月23日(土) 15時15分

ホームページモニター募集
年に数回のアンケートにご協力いただきモニターを募集いたします。
募集人数 本学学生・大学院生(50人)、卒業生(30人)、在学生のご父母(20人)
募集期間 12月15日(火)～2016年1月14日(木)
応募方法 ホームページの応募要領をご覧ください。
※お問い合わせはホームページ運営委員会事務局(広報課E-mail: info@acc.senshu-u.ac.jp)まで。

今年度2回目となる社会知性開発研究センター「古代東ユーラシア研究センター」のシンポジウム「古代東ユーラシアにおける中心と周縁」が11月7日、神田キャンパスで開催された(1面に写真)。

中心(中国)、周辺(朝鮮半島)、辺縁(日本列島)を相対的にとらえ、視野をユーラシア大陸の東側全体に広げて人の移動や地域・国家のつながりを考察するのがねらい。約200人が講演と

討論に聴き入った。飯尾秀幸センター代表(文学部教授)は趣旨説明で「東ユーラシアは仏教を主体的に取り入れた地域と考えることもできる」と提起。「シンポジウムのタイトルを周辺でな

く周縁としたのは、仏教思想の「縁」や「縁起」を意識したため」と補足した。九州大学教授の川本芳昭氏は、6世紀の中国王朝と周辺諸国・部族の関係について講演。「皇帝が異族の有力者の

子弟を臣下に置き、官僚や親衛隊として重用したのは人質の意味もあった」と解説。「後期の遣唐留学生も中国側にとっては人質という一面があった」と指摘した。

関東学院大学教授の田中史生氏は「国際交易と列島の北・南」と題し、日本の北(東北北部・北海道)と南(琉球列島)な議論が行われた。

後半は高久健二教授の司会で質疑応答と討論が行われ、遣唐留学生の両面性や中心と周縁の多様なあり方をめぐって活発な議論が行われた。

質問に答える広渡教授(左)と深澤教授

法律学と政治学の両面から共通のテーマを掘り下げて論じる市民と学生のための公開講座「法律学と政治学の最前線Ⅱ」(法学研究所)森川幸一(所長)が神田キャンパスで行われた。

昨年度から始まった3回シリーズで、2回目の11月14日は「市民と国民」がテーマ。市民と国民の関係を掘り下げる。深澤教授は市民と国民が誕生した経緯と意味の変遷を古代ギリシャに始まる政治思想史の観点からたどった。さらに安部法制、シリアやイラクな

遣唐留学生の姿を追う



▲ 多くの聴講者が来場し、報告に耳を傾けた

社会知性開発研究センター「心理学」研究センターのシンポジウム「融合的心理学の創成」の連続性を探る」が10月24日、神田キャンパスで開かれた。プロジェクトは、さまざまな領域に細分化してきた心理学を、ヒト・動物、基礎・臨床などの対象や領域にとらわれず、新たな視点で再統合しようと2011年

度からスタート、今回のシンポジウムが5年間の研究の集大成となる。同センターからは、長田洋和人間科学部教授(センター代表)、大久保重典同教授、澤幸祐同教授、石金浩史同教授、国里愛彦同教授が研究成果を報告。澤教授と国里教授は、研究を進展させる手法として「ベイズ統計学」を紹介

既にある知識やデータを思い、観測できない事柄の確率を算出できるとして「臨床現場でも、雑多な臨床・行動データから患者の負担なく有益な知見を導き出せる」と(国里准教授)と説明した。

また、脳と知覚の関連を研究するノルウェー・オスロ大学のアルノー・ラエン教授が瞳孔の反応について講演した。

パネル討論には、センター客員研究員であり東京大学大学院教授の長谷川寿一氏も参加。議論はベイズ統計学を中心に進み「目に見えない思考や行動の理由、様式などを確率で把握し、グラフ化もできるベイズ理論は異なる領域の研究を理解し合うのに有効」として、数学教育の重要性が確認された。

市民」と「国民」
現代の意義を考える
広渡・深澤両教授が講演

法律学と政治学の両面から共通のテーマを掘り下げて論じる市民と学生のための公開講座「法律学と政治学の最前線Ⅱ」(法学研究所)森川幸一(所長)が神田キャンパスで行われた。

昨年度から始まった3回シリーズで、2回目の11月14日は「市民と国民」がテーマ。市民と国民の関係を掘り下げる。深澤教授は市民と国民が誕生した経緯と意味の変遷を古代ギリシャに始まる政治思想史の観点からたどった。さらに安部法制、シリアやイラクな

プロジェクトの集大成

「市民」と「国民」 現代の意義を考える

広渡・深澤両教授が講演

「市民」と「国民」として、現代社会が直面する問題を解く力を生かす。学生ら約80人が熱心に聴講、講演後の質疑応答も活発だった。

工藤前短大校長
教育文化功労賞
美唄市

